

自己開示における内的体験について

羽野(謝) 玲糸

1. 問題

1. 自己開示

(1) 社会心理学における「自己開示」

「自己開示 Self-Disclosure」という語は、米国の心理学者Jourard (1958) によって、初めて用いられた心理学用語である。以来、自己開示に関する多くの研究が、特に社会心理学の領域で行われてきた。その際、「個人的な情報を他者に知らせる行為act of revealing personal information to others」(Jourard, 1971) という定義のもとに、自己開示度を、従属変数または独立変数として、様々な要因とともに扱っている。その結果、多くのことが見出されてきており、例えば、自己開示を引き出す最大の要因は、相手の自己開示であるということは、多くの研究で一致している (Jourard, 1971; 榎本, 1997)。また、親しい関係と自己開示は相互に改変することや、性による男女のサブカルチャーの違いが男女間の自己開示度の違いに影響すること、また、自己開示によってプライバシーの調整を行うことや、自己開示はストレスへの対処になり得ることなどが、幾多の研究によって示されてきている (Derlega, Metts, Petronio & Margulis, 1993)。このように、社会心理学的な研究では、対人関係における自己開示の機能という観点から、実証的な研究が行われ、さらにそこから様々な仮説やモデル、理論が考えられてきた。

(2) 臨床心理学における「自己開示」

ところで、臨床心理学の領域でも、「自己開示」という用語は用いられており、実証的な研究とともに、事例研究などでもしばしば見られる。

実証的な研究では、社会心理学における研究と重なる場合も多く、実験室で行われていた調査を治療の場に置き換えた、治療者とクライアントという関係の中での自己開示の機能について、種々の研究がなされている。事例研究では、主に「治療者の自己開示」として登場している。「心理臨床場面というのは、クライアントの自己開示の場そのものである」(西井, 2003) が、クライアントの側の開示は、こうした事例研究の論文や実際に事例を検討する場で「自己開示」と呼ばれることはほとんどなく、「自分語り」(齊藤, 1990) と呼ばれることが確認された。一方、治療者が自分のことを話す場合、「治療者の自己開示」として取り上げられ、「治療者は自己開示を行うべきか否かという議論からの発展」という文脈で見られることが多い。岡野 (1997; 1999) によると、Freudは、治療者が「自分の精神的な欠陥や葛藤があることをかいま見させたり、自分の生活についての個人的な情報を与えること」は「暗示による治療に属して」しまい、「これは無意識を明らかにすることには役に立たない」という匿名性の原則を挙げていたが、この警告

にはそれなりに根拠が見出せるものの、近年の米国の精神分析界においてはこの原則に修正が加えられつつあり、治療者の「自己開示」はある程度起きてしまうという認識や、「自己開示」は場合によっては治療的となりうるという見解が一般化しつつあるという。岡野はこれを妥当と考え、治療者の自己開示にのみ議論を限定せず、「自分を用いる」という概念に拡張して論じることを提案し、そこに積極的意味を見出している。また、遠藤(2000)は、「治療者の逆転移を活用した自己開示技法の有効性」について報告している。中田(2001)は、エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの否定的自己開示が効果的な場合の諸条件や意義について考察している。成田(2002)は、治療者の介入を取り上げた中で、治療者の言葉が、あるときは「共感とも解釈とも自己開示とも言うる」ことについて、述べている。

このように見てくると、臨床心理学領域において、自分を「語る」クライアントと、「自己開示」する治療者、という表現のされ方にニュアンスの違いが窺える。しかし、「自己開示」という語を用い始めたJourardは、もともとどのような意味として用いていたのだろうか。

(3) Jourardの「自己開示」

Jourard(1971)は、自分の臨床経験を語る中で、クライアントにも治療者にも「自己開示 Self-Disclosure」を使っている。そして、その著書が『透明なる自己 THE TRANSPARENT SELF』という通り、誠実な自己開示 authentic self-disclosure がなされ、隠蔽されたところのない、透明なる自己を目指すことの重要性を、治療の場を離れた人間全体に言えることとしてしている。彼は、開示は開示を招来することを実証的に見出し、また臨床場面においても、「自分をあらわした」とき、よい治療関係がえられた経験から、「人間が自分を他の人に開示する結果として以外には、自分自身を知ることができない」「人は自分自身を十分に他の人に開示することができるようになったときに、真の自己 real self との接触がどうすれば豊かになるかを学ぶのであり、そこでこの知識にもとづいて自分の運命をいっそう良い方向に、むかわせることができるようになるのである。」という考えを持った。Jourardは、先述した、近年の「治療者の自己開示」についての認識の変化より少し早く、「治療者の自己開示」の意義について考え、実践していたようである。これはFreudの「禁欲原則¹⁾」や、Kubieの「分析の隠れ身²⁾」などが言われてきた後の時代の補償という見方も考えられるのではないだろうか。

Jourardは「自己開示は、自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚しうるように自身を示す行為である」と述べている。これは、何かもともと自分というものが在り、かかっていたベールを一瞬でとるかのようなニュアンスである。一方、自分を「語る」という表現には、それより長い時間の流れが感じられないだろうか。「自分(の物語)を「語る」クライアント」と「自己開示」する治療者」という表現が多く、「自己開示」するクライアント」と「自分を「語る」治療者」という表現があまりなされないのは、やはり実際の臨床場面において自分をあらわす比率が、時間的にも態度的にもクライアントの方が大きく、治療者は小さい、と考えられていることによっているのかもしれない。

2. 間主観性

しかし、たとえ実際に話しているのはクライアントのみの場合であっても、二人の人がそこに居る、というだけで、すでにお互いがお互いに自分をあらわにしている、という考え方をしてみたい。このような考え方は、intersubjectivity と呼ばれ、間主観性や間主体性と訳されている。

精神分析学の分野でintersubjectivityを提唱している人は複数おり、厳密には、上記の考え方は、Ogden (1994) に最も近い。Ogden (1994) の著書を訳した和田 (1996) によると、彼は「主体」の概念を大切にし、その「あいだ」の空間を論じていることから、彼のintersubjectivityは、間主体性と訳すのが適当であるという。ここでいう「主体」とは、「今、現在を体験している「私」(experiencing "I") を指し示すもの」(和田, 1996) である。その特徴は、「二つの主体が存在すれば、必ずその間に、間主体は生まれ、それがお互いの主体性を規定する」(和田, 1996) ことであり、精神分析が扱っていくのは、自我でも自己でもない主体であるとして、新しい「two person model³⁾」が生まれたとされる。

和田 (1996) や岡野 (1999) によると、これまでの流れは、Freud (1923) による「自我とエス」という論文から、自我の機能を研究し、臨床に応用していこうとする自我心理学が主流となり、そして今は対象関係論⁴⁾ や (対人) 関係論⁵⁾、そして米国でもっとも人気があるとされる自己心理学が注目されている。自己心理学は、Kohutから発展しているもので、「自我という人の心の一部ではなく、「自己」という、人とかかわりあいをもてる人間の心全体をまとまりのあるものとしなければならない」(和田, 1996) とする考え方である。その中から、Stolorowが、間主観性理論を提唱した。Stolorowは精神分析を、「二つの主観性—患者の主観性と治療者のそれ—の交差が構成する心理的な場において起こる現象を解明する作業」だと考えた (丸田, 2002)。間主観性とは、ここでは「精神分析の治療場面において生じる出来事は、分析家と患者の相互交流の産物だ、ということ」(岡野, 1999) だが、和田 (1996) によるとStolorowのintersubjectivityは「相互主観性」とでも訳すべきで、両者の交流そのものよりも、それによって作られる一種の心的な空間、つまり二つの主体の「あいだ」に着目したOgdenのintersubjectivityとは違う、としている。

ここで取り上げたいのは、Ogdenのintersubjectivityに近いものの、実際の面接場面を想定すると、相互主観性という意味においても考えることになりそうである。したがって、これらを厳密に区別することは避け、どちらも「間主観性」と表し、丸田 (2002) が「心の量子⁶⁾」と呼んだ「現実の評価は観察者を含まねばならず—客観的現実には常に主観的である」(丸田, 1992) というKohutの考え方を発展させたもの、として考えていく。

また、間主観性という概念は、学問間の枠を越え、心理学や精神分析学の領域にとどまらず、社会学、人間科学、そして哲学などで用いられており、学際的な概念として有用なものであるとされ、近年、特によく見られるようになってきている。「ある種のマジック・ワードになってしまっているような気も無きにもあらず」(木戸, 1999) という指摘もあるが、今回の調査で重要な概念と位置づける。

そして次に、筆者の臨床経験から、何人かの人とそれぞれ一対一で会う時、個人間で見ると各々にある一定の傾向を持ち、個人内ではその時のその人にその時の筆者は一度しか会えないという、いわば毎回"一期一会"であるとも言いうる不思議な感覚を生む、面接の"場"に漂う"雰囲気"について考えたい。

3. 雰囲気

「雰囲気」とは、辞典によると「その場を満たしている一般的な気分・空気。>もと、地球を取り巻いている空気のこと。」とある (岩波国語辞典—第四版—, 1986)。この「雰囲気」につい

て、ドイツの精神病理学者Tellenbach (1968) は、深い考察を重ねている。

Tellenbach (1968) によると、雰囲気は、「人と人との関係がそこから生じてくるような根源的な基礎であり、人と人の上にアーチ形に存在する共通の天であって、これがはじめて他人を隣人 (ミットメンシュ⁷⁾) に変え、彼らの相互理解をはじめて可能にする。」と考えられ、「状況」として二人の人間を結びつけるものは、一次的には雰囲気的に規定される。二人はそれぞれ独自の仕方と同じ気に関与している。」という。

彼はまた、Rudert (1964)⁸⁾ を引用して、雰囲気の特徴や雰囲気的なものを次のように表している。「雰囲気にとって特徴的なのは、それが人間をとりまいていることである。人間はそのなかで自分の輪郭を越えて流れ出し、まわりの空気をぐるりと満たしながら、かおりの発散に似て、本質をとりまく空間を満たす。」「いわば切りとられた諸特性のまわりを外でとりまいているだけではない。それは諸特性をつらぬいてもいるし、内部へ浸透してもいる。」

そしてTellenbach (1968) は、雰囲気を客体化することの困難性についても触れている。その理由は「雰囲気的なものが対象から切り離せない、というよりむしろその状態性と同時に生起するということにも基づいている」からである。しかし、客体化はできないが定式化はできるとし、「とりわけ、雰囲気的なものが相互主観性の媒体として感知可能となるところで、そう言える」と述べている。ここで、「相互主観性」と言われているのは、Stolorowの「相互主観性 intersubjectivity」と同一ではないが、雰囲気について考えるとき、間主観性を取り上げるのは自然なことだと考えられる。

4. 本稿の位置づけ

面接の場で、自分のことを話している時、話し手は様々な内的体験をしているだろう。場の雰囲気が、その場に居る両者ともと関係していると認めるとき、「内的体験」というものが、場の雰囲気から切り離された私的なものではありえず、「私」が知りうる相手の体験に、「私」自身の体験抜きで近づこうとすることはできないのではないか。また、「自分自身をあらわにする行為」(Jourard, 1971) として「自己開示」という語をとらえる時、どちらの人間が多く話していても、自己開示はお互いに行われているものと考えことにする。こういったことから、本稿の題名にある「自己開示における内的体験」を、調査対象者だけのものではなく、調査者のものでもある、とする。したがって、調査者自身の「自己開示における内的体験」についても取り上げた。その際、自分のことを話すことは「自己紹介」とし、「自己開示」とは区別した。この意味で、社会心理学で使われている「自己開示」とは意味を異にしている。「内的体験」は、「特に雰囲気の印象について感じている体験」とした。

本稿の全体的な位置づけとしては、筆者の臨床経験から、その場の雰囲気を、相手は一体どう感じているのか、また自分はどう感じているのかについて調べようとするものであり、「調査者の主観」と「調査者の固有性が調査対象者にもたらす影響」という要因をはずすことのできない入れ子構造を持つ事例研究と、統計的な処理が可能な客観性を持つ実証的研究との間に位置するものと考えられる。

II. 目的

本稿は、調査対象者と調査者が、その場の印象・雰囲気をそれぞれどのように感じているか、また、その場に居る自分自身や、お互いをどのように感じているか、さらに、その場で話された

内容についてどのように感じているかという印象を見ることで、場の雰囲気というものの性質を考える。

Ⅲ. 方法

1. 尺度の作成

印象評定のため、次の4つの尺度「この場の印象・雰囲気尺度」、「この場にいる自分自身の印象尺度」、「聞き手の印象尺度」、「自己紹介の内容の印象尺度」を作成した。これら4つの尺度は全て、岡田（1969）による箱庭の印象の分析に用いられた形容詞20対に、[あたたかい一つめたい]を加えた形容詞21対を用いた、7段階のSD法評定であった。

今回測定したいのは「場」の印象・雰囲気であり、それを中心に据えている。「自分自身」や「聞き手」の印象、それに「自己紹介内容」の印象は、その「場」の中であって、「場」の影響を受けているものとして見ていく。「場」の印象・雰囲気と、その「場」にいる人の印象や話した内容の印象との関わりを見るため、尺度はそれぞれ全て同じ項目にして、その異同を調べることにした。

岡田（1969）の形容詞20対は、箱庭の印象を分析するために選択されたものである。箱庭とは57×72×7センチメートルの箱の中に砂が入っており、その中にミニチュアの玩具を好きなように置いていくことで、一つの世界を作ったものである。もともと世界技法と呼ばれた箱庭療法の作品である箱庭を、一つの世界が表現された、一つの場・空間と見なし、箱庭の印象を評定するために用いた形容詞対を、今回は場の印象を評定するために選択した。

加えて本稿では、独自に[あたたかい一つめたい]という形容詞対を加えた。これは、認知心理学の領域にある、対人認知研究の中で、印象形成（impression formation）について最初に取り組み、「あたたかい」「つめたい」という形容詞が印象形成に大きく寄与するとしたAsch（1946）の研究による（瀬谷，1977）。また、井上・小林（1985）によれば、これらは様々な分野で使用頻度が主要な形容詞対68項目のうち第3位に高いことがわかっている。

作成した尺度自体は4つであるが、「この場の印象・雰囲気」の変化を見たいため、調査開始時と調査終了時用の二つを作った。つまり、「a1：この場の印象・雰囲気尺度（調査開始時）」、「a2：この場の印象・雰囲気尺度（調査終了時）」「a3：この場にいる自分自身の印象尺度」、「a4：聞き手の印象尺度」、「a5：自己紹介の内容の印象尺度」の5つを作成した。同じものを調査者にも作成し、それらを「b1：この場の印象・雰囲気尺度（調査開始時）」、「b2：この場の印象・雰囲気尺度（調査終了時）」「b3：この場にいる自分自身の印象尺度」、「b4：聞き手の印象尺度」、「b5：自己紹介の内容の印象尺度」とした。

2. 面接内容の設定

臨床面接に準じ、言語的な開示として言葉での自己紹介と、非言語的な積極的開示として描画を設定した。これらは、本稿での「自己開示」を非言語的な消極的開示としてそこから区別される。描画は、Buck（1948）によってHouse-Tree-Personテストの一部として考案された、家の外観を描いてもらう家屋画（加藤・荻野，1982）と、徳田（1982）によって考案された、部屋の内部を描いてもらう室内画（Raum Test）（山森，1999）を取り上げた。これらは、Tellenbach（1968）の、子どもはまずその家・家庭の雰囲気を身に付けて初めて自己の雰囲気の形成に成功する、とする知見や、「ある人がいかに世界を体験しているかは、その人がいかに家屋に「住ま」

えているかに反映されている」という人間と空間 (Raum) の関係に関するBollnow (1963) の考察など、それぞれの描画の性質とそれに関する先行研究を参考に選択した。これらの面接内容は、今回は雰囲気の変化を生み出しうる媒介として設定したものであり、それぞれについての処理・結果の考察は別の機会に譲る。

3. 調査対象および調査方法

調査対象：大学生・大学院生32名 (男性15名, 女性17名)。平均年齢は男性21.4歳 (SD2.27)、女性20.4歳 (SD2.23)、全体で20.8歳 (SD2.27) であった。調査者との関係は、全員、調査時に初対面か、あるいは調査依頼時に初対面で、依頼時から調査時までの間に個人的な話をしたことはなかった。

調査時期：2004年12月

調査場所：今回の調査では、特に調査場所が重要な要因となるため、同じひとつの面接室で行った。

用具：印象評定用紙 (調査対象者用にa1のみの冊子とa2・a3・a4・a5の冊子、調査者用にb1のみの冊子とb2・b3・b4・b5の冊子を1部ずつ)、4Bの鉛筆2本、消しゴム、A4の画用紙2枚、クリップの付いたボード、録音用マイク付ICレコーダー、MDレコーダー、MD、どの調査も同じセーター、綿パン、コート、マフラー、ズック靴

調査手続き：入室後、印象評定 (a1/b1) を行った。次に自己紹介、家屋画と室内画、印象評定 (a2・a3・a4・a5/ b2・b3・b4・b5) の順に行った。最後にインタビューを行った。

IV. 結果と考察

調査対象者個々人が感じた場の雰囲気の影響の総体を見ることで、今回の調査の場に共通した、ある一定の方向を持った雰囲気の影響や、その変化の仕方の傾向が見出せると考えた。また、調査者が感じた調査対象者個々人における場の印象・雰囲気の影響の総体を見ることで、調査者の感じ方の傾向や、感じ方の変化の仕方の傾向が見出せると考えた。調査対象者による個人間の感じ方の違いについては、個別に見ていく必要があるため、別の機会に譲ることとした。

1. 印象評定⁹⁾

印象評定では、因子分析をして因子ごとに見ていくという方法が一般に考えられるが、今回は、細やかに印象を描き出したいと考えたため、各形容詞対の影響一つ一つをプロフィールで見えていくことにした。その中でも、人に注目したいことから、自己紹介内容についての印象評定は関係と比較することにのみ用いた。

また、印象評定で、ある値に丸がつけられたことと、評定者が本当にそう感じていたかどうかということは、厳密には別である。しかし、結果の記述では、ひとまず「感じていた」とみなして、そう記述し、このことについては、考察でもう一度とりあげ、考えていく。

(1) 場の印象・雰囲気の変化 (調査対象者全体にとって a1-a2) (図1.)

調査対象者全体が感じた「調査開始時の場の印象・雰囲気」と「調査終了時の場の印象・雰囲気」を比較するため、t検定を行った。全体として「調査開始時の場の印象・雰囲気」は、静的で、やや閉鎖的で、やや小さい印象だが、同時に、やわらかくて、あたたかく、豊かで、女性的で、明るく、愉快で、やや充実しており、ややにぎやかで、ややくつろぐ場という印象でもあるようだった。「調査終了時の場の印象・雰囲気」は、やわらかくて、あたたかく、豊かで、のび

のびして、女性的で、明るく、充実していて、くつろぎ、愉快的な印象に加え、やや静的で、やや深い印象であった。

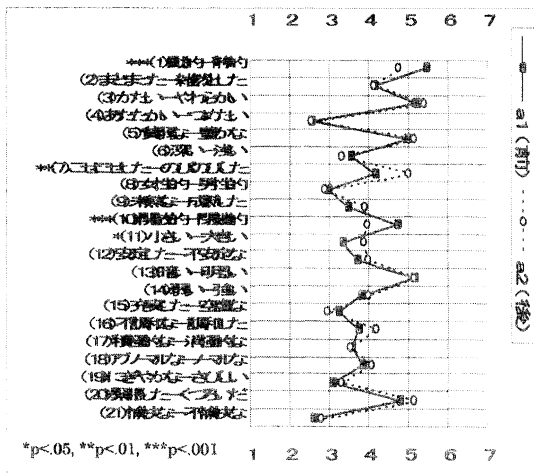


図1. 場の印象・雰囲気の変化（調査対象者全体a1-a2）

調査開始時と調査終了時において、調査対象者全体の感じる場の印象・雰囲気の変化に有意差があったものを見ていく (*p<.05, **p<.01, ***p<.001)。有意差は全部で4項目についてあった。[静的-動的]では、静的な印象からやや静的な程度に変化した (***)。[こせこせした-のびのびした]では、どちらでもない印象が、のびのびした印象へ変化した (**)。[開放的-閉鎖的]では、やや閉鎖的だった印象が、どちらでもない、という程度まで、開放的な方向へ変化した (***)。[小さい-大きい]では、やや小さい印象

が、どちらでもないという程度まで、大きい方向へ変化した (*)。

また、ほとんど変化のなかったものについて見ると、[まとまった-雑然とした]では、どちらでもないところでほとんど不変であった。[あたたかい-つめたい]では、あたたかい印象のまま変化がなかった。[暗い-明るい]では、明るい印象のまま変化していなかった。[積極的-消極的]では、どちらでもないが、微かに積極的よりではある、という程度のまま不変であった。

これらのことから、全体的には、空間がやや大きく開いて感じられる変化が見られる傾向にあったと言える。

(2) 場の印象・雰囲気の変化（調査者にとって b1-b2） (図2.)

調査者が感じた「調査開始時の場の印象・雰囲気」と「調査終了時の場の印象・雰囲気」を比較するため、t検定を行った。

全体として、「調査開始時の場の印象・雰囲気」は、ほとんど何の印象もなかった。あえて言うなら、微かに安定していたり、微かに緊張したりしている印象であった。それに比べ、「調査終了時の場の印象・雰囲気」は、安定した印象になった他、まとまっていて、やわらかく、あたたかく、豊かで、深く、のびのびして、開放的で、明るく、充実して、調和しており、ノーマルで、くつろいだ印象・雰囲気を、それぞれやや感じている、という結果になった。

調査開始時と調査終了時において、調査者の感じる場の印象・雰囲気の変化に、有意差があったものを見ていく。有意差は、全部で14項目についてあった。[まとまった-雑然とした]では、まとまった方向へ変化していた (**)。[かたい-やわらかい]ではやわらかい方向へ (*), [貧弱な-豊かな]では豊かな方向へ (***)、[深い-浅い]では深い方向へ (***)、[こせこせした-のびのびした]ではのびのびした方向へ (*), [開放的-閉鎖的]では開放的な方向へ (*), [小さい-大きい]では大きい方向へ (***)、[安定した-不安定な]では安定した方向へ (**), [暗い-明るい]では明るい方向へ (**), [充実した-空虚な]では充実した方向へ (*

)、[アブノーマルな-ノーマルな]ではノーマルな方向へ (*)、[にぎやかな-さびしい]ではにぎやかな方向へ (*), そして、[緊張した-くつろいだ]ではくつろいだ方向へ (***) と、有意に変化していた。逆に、ほとんど変化のなかったものについて見ると、[弱い-強い]はどちらでもないまま不変であった。[動的-静的]では、どちらでもないまま、全く変化しなかった。

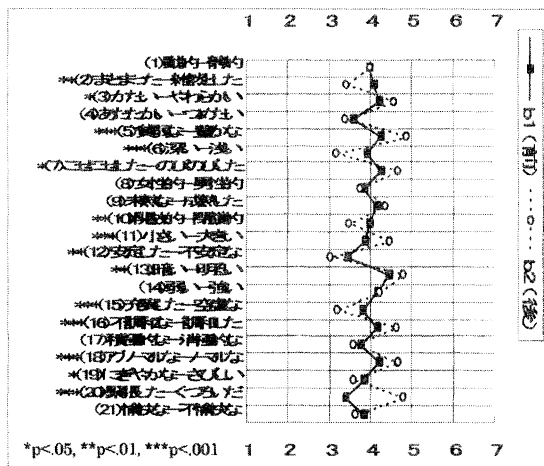


図 2. 場の印象・雰囲気の変化 (調査者b1-b2)

(3) 調査対象者全体の印象 (a3-b4)

調査の場において「調査対象者全体が感じた自分自身の印象」と、「調査者が感じた調査対象者全体の印象」とを比較した。

自己紹介や描画を行った後の、「調査対象者全体の感じたその場にいる自分自身の印象」は、全体的には、愉快的な印象で、加えてややあたたかく、ややのびのびして、やや明るく、やや充実している印象であった。一方、「調査者の感じた調査対象者全体の印象」は、豊かな印象を感じており、その他には、まとまっていて、あたたかく、深く、のびのびしていて、開放的で、安定して、明るく、強く、充実して、調和しており、ノーマルで、愉快だという印象を、それぞれやや感じていた。

両者が感じた、調査の場にいる調査対象者の印象に、有意差があったものを見ていく。有意差は、全部で8項目あった。[動的-静的]では、両者ともどちらでもないものの、調査対象者は少し静的方向なのに対し、調査者は少し動的方向に感じていた (**)。[まとまった-雑然とした]では、調査対象者はどちらでもないのに比べ、調査者はややまとまっている (***) と有意に感じていた。[貧弱な-豊かな]では、調査対象者はどちらでもないのに比べ、調査者は有意に豊かだ (*) と感じていた。[深い-浅い]では、調査対象者はどちらでもないのに比べ、調査者はやや深い (*) と有意に感じていた。[安定した-不安定な]では、調査対象者はどちらでもないのに比べ、調査者はやや安定している (***) と有意に感じていた。[弱い-強い]では、調査対象者はどちらでもないのに比べ、調査者はやや強い (***) と有意に感じていた。[不調和な-調和した]では、調査対象者はどちらでもないのに比べ、調査者はやや調和している (***) と感

全体的に、特に非常に大きな変化をしたのは、緊張した印象から、くつろいだ印象へと、雰囲気の感じ方が変わったことであった。調査者は、調査の回数を重ねる毎に、慣れて自分自身の緊張は減っていったのだが、それでも面接開始時と終了時ではこれだけ差が見られた。これは、相手が緊張していると感じられた場合、その場の雰囲気も緊張を帯びているように感じられ、相手が終了時によりリラックスしていると感じられると、その場の空気が緩んだ気がして、評定に影響したことが考えられる。

じていた。[愉快的—不愉快的]では、両者とも愉快的な方向ではあったが、調査者がやや愉快と感じているのに比べ、調査対象者は有意に愉快だ（**）と感じていた。

逆に、ほとんど印象の差のなかったものについて見ると、[にぎやかな—さびしい]は、両者と微かににぎやかな方向によってはいるものの、どちらでもない印象あった。[かたい—やわらかい]では、微かにやわらかい方向によってはいるものの、どちらでもないまま、全く差はなかった。

これらのことから、調査者は、調査対象者よりも、多岐にわたって様々な印象を細かく感じていると評定し、調査対象者本人は自分に対して控えめに明るい方向の評定をつけていることが考えられる。

（４）調査者の印象（a4-b3）

調査の場において、「調査対象者全体が感じた調査者の印象」と、「調査者が感じた自分自身の印象」とを比較した。

「調査対象者全体の感じた調査者の印象」は、全体的には、静的で、まとまっていて、やわらかく、あたたかく、深く、女性的で、成熟していて、安定していて、充実していて、調和していて、ノーマルだ、と感じられており、加えて、やや豊かで、ややのびのびして、やや明るい印象であった。一方、「調査者の感じたその場にいる自分自身の印象」は、くつろいだ印象を感じていた他、豊かで、深く、安定していて、充実していて、調和していて、積極的な印象を、それぞれやや感じていた。

両者が感じた、調査終了時の場にいる調査者の印象に、有意差があったものを見ていく。有意差は、全部で13項目あった。調査者がどちらでもないのに比べ、調査対象者全体は、静的（***）で、まとまっていて（***）、やわらかく（*）、あたたかく（***）、女性的（***）で、成熟していて（***）、ノーマルだ（***）と有意に感じていた。また、[深い—浅い]では、調査者もやや深いと感じていたが、調査対象者全体は有意に深い（*）と感じていた。[安定した—不安定な]では、調査者もやや安定していると感じていたが、調査対象全体は有意に安定して（***）感じていた。[調和した—不調和な]では、調査者もやや調和していると感じていたが、調査対象者全体は有意に調和している（**）と感じていた。さらに、[小さい—大きい]、[弱い—強い]では、両者ともどちらでもないものの、調査対象者全体の方が微かに大きい（*）、微かに強い（**）と感じていた。最後に、[緊張した—くつろいだ]では、調査対象者全体はどちらでもないのに比べ、調査者は有意にくつろいでいる（**）と感じていた。

これらのことから、調査者は自分自身に対して積極的に印象を評定することはしておらず、従って調査対象者との差が多くなったと考えられる。

ここで、評定値に丸をつけることとその評定の印象を感じていることとは、厳密には違うということに触れたい。評定をつける相手を前にし、しかもその結果を相手に見られる可能性がある時、どうしても正直ではなくなり気を遣うことが考えられる。個々人では、様々な評定がされていたものの、全体で見るとき、このように半ば不自然ともとれる程、好印象な結果となった。相手が目の前に居る状態で評定する時、微かに妙な雰囲気になったかもしれず、その雰囲気が好印象につけさせることになったとも考えられる。実際、それに言及した人は一人だけだったが、その人は「聞き手の印象に例えば[アブノーマルな]とかつけたら失礼ですよ」「答えづらいな」

と冗談混じりにコメントした。しかし、本稿では、そういった全てのことを内包した雰囲気を持った場で、どのように評定をするのか、という視点からこの結果を扱うため、評定された結果そのものを大事にして見てきた。

2. 場の印象・雰囲気と人や自己紹介内容の印象との関係

場の印象・雰囲気と、人（調査対象者・調査者）の印象や、自己紹介の内容の印象との関係を見るため、今回は、それぞれの尺度間の距離を調べた（表1, 2）。その際、場の印象・雰囲気は、調査終了時のものを扱った。これは、他の印象が調査終了時のものだったためである。

その結果、場の印象・雰囲気と最も距離が短かったのは、調査対象者では、自分自身（調査対象者自身）の印象であった。また、調査者では、話し手（調査対象者）の印象であった。

表1. 印象間の距離（調査対象者）

	場の印象・雰囲気(a2)
自分自身の印象(a3)	5.87
聞き手の印象(a4)	6.66
自己紹介内容の印象(a5)	7.30

表2. 印象間の距離（調査者）

	場の印象・雰囲気(b2)
自分自身の印象(b3)	3.73
話し手の印象(b4)	3.28
自己紹介内容の印象(b5)	3.82

このことから、調査対象者はその場における自分自身の印象が、その場の印象・雰囲気に溶け出したかのような感じ方なのではないかと推測される。一方、調査者は、ずっと同じ調査場所に居るため、調査対象者が変わることによって場の印象・雰囲気も随分違うという経験をした。これらは、Tellenbach（1968）の言うような「雰囲氣的なものが対象から切り離せない、というよりむしろその状態性と同時に生起する」とされる雰囲気の特徴を表していると考えられる。

また、調査者の各印象間の距離は3.28～3.82の間にあり、いずれも調査対象者の各印象間の距離よりも短かった。これは、調査者が調査対象者よりも、場の印象・雰囲気と各印象とに差を感じにくいということであり、調査者自身の感じ方の特性であるのか、調査者という立場に特有の感じ方であるのかについて詳らかにすることが、今後の課題として残された。しかし敢えてここで考察を試みるとすると、調査者は、この調査をする目的を把握していることから、調査の手続き全体を俯瞰する目を持っており、調査対象者よりも遠い視点でいることから、自然と全印象が近いものにまともっていったのではないかと考えられる。ここに、調査者をも調査内に組み込んだ研究というものの特徴が見られるのではないだろうか。

印象評定では、男女に群を分けるとまた特徴的な結果が出た。また、自己紹介の内容や家屋画・室内画に関しても興味深い結果が得られたが、今回は紙数の関係上、全体の印象評定の結果のみを考察した。

V. 総合考察と今後の発展

様々なものが織り合わされ重なり融け合って一つの場の雰囲気が現れる中で、以上の結果は臨床を行う上でも、また日常生活において人と会う場面を考えても、非常に興味深いものだった。今回、個別事例をそれぞれ見ていくと、調査者として得る所が大きかった。中には、最初の場の印象・雰囲気が、調査者と全く同じ評定だった調査対象者の方（男性1名、女性2名）や、場の印象・雰囲気と自分自身の印象との距離が0の方（女性2名）がおられた。こういった場合を含む個別の事例について、詳細に考察することが今後の課題である。

また、これらの結果は、全て、調査者がある固有性を持った「私（筆者）」であったことに由

来する。今回の試験的な要素はここにあり、このことを前提とするために、間主観性という概念を取り上げた。雰囲気について調査するには、「私」というものは切り離せないことが、雰囲気についての様々な知見及び間主観性の考え方から理解される。雰囲気というものの性質は、心理臨床において、本質的なものの一つであると考えられる。「心理療法とは、ClとThの2者を1つの容器に入れ、火をたいてそこに強烈な変化をさせるようなもの。中に入るのもThなら容器も火もThかもしれない。」(河合, 1970)と表現される心理臨床の面接場面で、「私」抜きには何も言うことはできない。このことは、事例研究法の意義として言えることとも通じると思われる。しかし、調査者の側も研究対象として俎上にのり、自分自身を含んだ調査を行う、という入れ子構造の複雑な研究方法として、いわば事例研究と実証的研究の中間に位置する今回の研究は、その困難さゆえ、どの程度広く受け入れられるかという疑念とともに、課題を多々残していると考えられる。自分自身の性質が非常に色濃く反映される方法と考えられるが、これまで述べてきたように主観のない客観はありえないということを鑑みると、特に今回のような研究は、それをどの程度徹底して自覚して行うかが問われるだろう。

付記

最後に、調査にご協力いただき、これから筆者が臨床の場で経験を積んでいこうとする際の貴重な知見と体験を与えて下さった調査対象者の方々と、色々な形で支えて下さった家族や友人や先輩方、そして論文作成にあたり、見守り、ご指導下さった東山紘久先生、河合俊雄先生に感謝いたします。

注

- 1) 分析者は患者が転移関係の中で求めてくる代理満足としての役割を放棄し、「満足されない願望を十分に残し」た状態に患者自身を置くことによって、「患者が最も激しく切望し、最も切実に表現している満足そのものを満足させないでおく」ことが重要であるとする考え。(『心理臨床大辞典』, 2004)
- 2) 治療者が自己を表すことは、患者の転移を写し出すスクリーンとしてのあり方に歪みをきたすことにつながるため、避けねばならないという考え。(岡野, 1999)
- 3) これまでの「two person model」は、治療者とクライアントの体験世界を、片方が変わればもう片方も変わる、という対の概念でとらえたものだった。(和田, 1996)
- 4) 英国から伝わり、人間を突き動かす基本的な動因は、対象(他人)と関わることであるというもの。内的対象という概念が重要な位置を占める。(岡野, 1999)
- 5) 対象関係論とサリバン学派の対人関係論との融合。人間は基本的に他者との具体的な関係性の中でとらえられるべきだとする。Mitchellなど。(岡野, 1999)
- 6) 間主観性という見方は、しばしば物理学でいう相対性理論や量子論になぞらえられ、科学主義的な見方は古典的なニュートン物理学になぞらえられることがある。(岡野, 1999; 丸田, 2002)
- 7) Mitmensch: 同胞; 同時代人としての人間(郁文堂『独和辞典』, 1999)
- 8) Rudert, F. (1964): Die personliche Atmosphäre. Archiv f. d. ges. Psychol. 116,291
- 9) 評定値が1~3または5~7の場合は、その印象が「あった」こととし、項目の名称をそのまま用いた。また、評定値が3.1~3.4または4.6~4.9の場合は、その印象が「ややあった」こととし、項目の名称に「やや」をつけた。さらに、評定値自体は3.5~4.5の範囲内でどちらでもないときとみなす。しかし、いろいろな尺度どうしを比較する際に、評定値がどちらでもない範囲内であっても有意差が見られた場合は、「微かにあった」「よりあった」などという表現を用いて記述した。

文献

- Bollnow, Otto Friedrich (1963) : MENSCH UND RAUM 大塚恵一・池川健司・中村浩平訳 (1978) : 人間と空間 せりか書房
- Buck, J. N. (1948) : THE H-T-P TECHNIQUE: A Qualitative and Quantitative Scoring Manual 加藤孝正, 荻野恒一訳 (1982) : HTP診断法 新曜社
- Derlega, Valerian J., Metts, Sandra., Petronio, Sandra.& Margulis, Stephen T. (1993) : Self-Disclosure 斉藤勇・豊田ゆかり訳 (1999) : 人が心を開くとき・閉ざすとき－自己開示の心理学－ 金子書房
- 遠藤裕乃 (2000) : 逆転移の活用と治療者の自己開示 神経症・境界例・分裂病治療の比較検討を通して 心理臨床学, 18(5), 487-498.
- 榎本博明 (1997) : 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 井上正明・小林利宣 (1985) : 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
- Jourard, Sidney M. (1971) : THE TRANSPARENT SELF. 岡堂哲雄 (1974) : 透明なる自己 誠信書房
- 河合隼雄 (1970) : カウンセリングの実際問題 誠信書房
- 丸田俊彦 (1992) : コ福特理論とその周辺－自己心理学をめぐって 岩崎学術出版社
- 丸田俊彦 (2002) : 間主観的感性－現代精神分析の最先端－ 岩崎学術出版社
- 中田行重 (2001) : ファシリテーターの否定的自己開示 心理臨床学研究, 19(3), 209-219.
- 成田善弘 (2002) : 精神療法家の仕事 8 | 治療者の介入－その2－共感・解釈・自己開示 臨床心理学, 2(2), 240-247.
- 西井克泰 (2003) : 自己開示 心理臨床大辞典 改訂版 培風館 225-227.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 (1986) : 岩波国語辞典－第四版－ 岩波書店
- Ogden, Thomas H. (1994) : Subjects of Analysis. 和田秀樹訳 (1996) : 「あいだ」の空間－精神分析の第三主体－ 新評論
- 岡田康伸 (1969) : S.D.法によるサンドプレイ技法の研究 臨床心理学研究, 8(3), 151-163
- 岡野憲一郎 (1997) : 「治療者の自己開示」再考－治療者が「自分を用いる」こと－ 精神分析研究, 41(2), 121-127.
- 岡野憲一郎 (1999) : 新しい精神分析理論-米国における最近の動向と「提供モデル」-岩崎学術出版社
- 太田俊二・川野健治・木戸功・橋弘志・圓岡偉男・原知章・三嶋博之・余語琢磨 (1999) : 間主観性の人間科学－他者・行為・物・環境の言説再構にむけて－ 川野健治・圓岡偉男編著 言叢社
- 斉藤久美子 (1990) : クライエントの「自分語り」について 臨床心理事例研究, 17, 23-27.
- 瀬谷正敏 (1977) : 印象形成 水原泰介編 個人の社会行動 東京大学出版会, 21-33.
- Tellenbach, Hubertus (1968) : GESCHMACK UND ATMOSPHERE. 宮本忠雄・上田宣子訳 (1980) : 味と雰囲気. みすず書房
- 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編 (2004) : 心理臨床大辞典 改訂版 培風館
- 山口素子 (1983) : 家屋画の安定性についての検討 心理学研究, 54(3), 160-166
- 山森路子 (1999) : 室内画に表現される内的世界についての一考察－境界づけられていない空間イメージをめぐって－ 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 373-381.

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

Inner Experience on Self-disclosure

HANO (SHA) Reishi

When you are in a room with someone, the impression on the atmosphere differs when you are with different people. This study investigated different kinds of impressions on the atmosphere the interviewee and interviewer perceived when they were in the same room, and also the change in impressions from the beginning of the interview to the end. Firstly, the definitions of "self-disclosure", "inter-subjectivity", and "atmosphere" were stated. Next, 32 individual interviews with undergraduate and graduate students followed. The interviews included impression ratings of the atmosphere, self-introductions, and drawings of a house and a room. The impression ratings were carried out at the beginning and the end of each interview. The results suggest that the interviewees' impression changes and that the room feels more spacious at the end of an interview. The interviewer gets a more positive impression at the end of an interview. Moreover, the interviewees' impression on the atmosphere had the closest link to the impressions on themselves, while the interviewer's impression on the atmosphere had the closest link to the impressions on the interviewees. It is suggested that the results come from the fact that the interviewer was "I", and therefore this study is considered to occupy an intermediate position between case and empirical studies.